

第44回 全国中学生人権作文コンテスト 滋賀県大会入賞作文集



人権イメージキャラクター
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

大津地方法務局
滋賀県人権擁護委員連合会

第44回全国中学生人権作文コンテスト 滋賀県大会表彰式

～ 令和8年1月17日(土) 栗東芸術文化会館 SAKIRA ～

表彰式



表彰状授与



優秀作品朗読



入賞者記念撮影①



入賞者記念撮影②

人権ふれあいのつどい ～中学生の語る想い～



栗東少年少女合唱団
による演奏披露



栗東市立栗東西中学校の
中学生による人権に関する活動発表

はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和56年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生を対象に、人権についての作文に取り組むことを通じて、人権尊重の重要性、必要性について理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として実施しているもので、本年度で44回目となりました。

大津地方法務局と滋賀県人権擁護委員連合会が実施しました同コンテスト滋賀県大会には、県内の57校から7,011編の作品の応募をいただきました。寄せられた作品は、日常生活の中から得た体験や、日頃感じたことが題材となっており、「戦争や平和」に関する問題についての作品が数多くあったほか、「インターネット」や「こどもの人権問題」をテーマとする作品が目立ちました。いずれの作品も、中学生らしい純粋な感覚で物事を捉えており、身近な人権問題に対する自らの考えが素直に表現されています。この作文集を一人でも多くの方々にお読みいただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、本大会の実施に当たり、御応募いただきました中学生の皆様を始め、御後援いただきました滋賀県教育委員会、NHK大津放送局、京都新聞、びわ湖放送株式会社、KBS京都、栗東市及び栗東市教育委員会の皆様方並びに多大な御支援をいただきました各市町教育委員会及び中学校等関係各方面の皆様方に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和8年3月

大津地方法務局
滋賀県人権擁護委員連合会

目 次

実施機関

第44回全国中学生人権作文コンテスト滋賀県大会実施機関 … 1

入賞作文

(注：学校名は令和8年1月1日現在のものを掲載しています。)

【大津地方法務局長賞】

「他人の心の痛みを分かる人」

……………滋賀大学教育学部附属中学校 3年 中瀬 翔貴 … 2

【滋賀県人権擁護委員連合会会長賞】

Mさんとの出会い

……………大津市立瀬田中学校 1年 山本 梨衣奈 … 4

【滋賀県教育委員会教育長賞】

「思いやりの災害対策」

……………長浜市立高月中学校 1年 石川 七菜 … 6

【NHK大津放送局長賞】

ふつうって、なんだろう

……………長浜市立木之本中学校 3年 本多 すみれ … 8

【京都新聞賞】

たった一言の重さ

……………長浜市立北中学校 2年 杉野 心咲 … 10

【BBCびわ湖放送賞】

「目に見えなくても」

……………長浜市立西浅井中学校 1年 竹内 碧海 … 12

【KBS京都放送賞】

支援級について

……………守山市立守山中学校 2年の生徒の作品 … 14

【審査員特別賞】

「なんで謝るんだろう」

……………大津市立仰木中学校 2年 竹中 颯花 … 17

「違いをこえて、つながる社会へ」

……甲賀市立水口中学校 1年 小 椋 理 衣 … 18

ちがっていてもつながっている

……愛 荘 町 立 愛 知 中 学 校 1 年 岡 島 快 斗 … 20

【奨励賞】

◇ 国境を越えた思いやり

……光 泉 カ ト リ ッ ク 中 学 校 3 年 山 内 寧 々 … 21

◇ 「指先から生まれる責任」

……甲 賀 市 立 水 口 中 学 校 3 年 三 澤 真 翔 … 23

◇ 「いじめのない社会」

……甲 賀 市 立 水 口 中 学 校 3 年 亀 井 勇 杜 … 24

◇ 「差別とこれからの社会」

……甲 賀 市 立 水 口 中 学 校 3 年 辻 満 輝 … 26

◇ 「みんなちがってみんないい」

…… 匿名の生徒の作品 … 28

◇ 「いじめの助け合いリレー」

……近 江 兄 弟 社 中 学 校 1 年 吉 田 未 菜 … 29

◇ 人権

……近 江 兄 弟 社 中 学 校 1 年 横 山 志 帆 … 31

◇ 普通による無意識の差別

……彦 根 市 立 中 央 中 学 校 2 年 松 尾 杏 … 33

◇ なりたい自分

……近 江 八 幡 市 立 安 土 中 学 校 1 年 西 川 結 恵 … 34

◇ 自分らしく生きる

……長 浜 市 立 南 中 学 校 の 生 徒 の 作 品 … 36

感謝状贈呈校

第44回全国中学生人権作文コンテスト法務省人権擁護局長
全国人権擁護委員連合会長感謝状贈呈校

… 38

第44回全国中学生人権作文コンテスト

<後援団体>

滋 賀 県 教 育 委 員 会

N H K 大 津 放 送 局

京 都 新 聞

び わ 湖 放 送 株 式 会 社

K B S 京 都

栗 東 市

栗 東 市 教 育 委 員 会

(順不同・敬称略)

<主催者>

大 津 地 方 法 務 局

滋 賀 県 人 権 擁 護 委 員 連 合 会

【大津地方法務局長賞】

「^{ひと}他人の心の痛みを分かる人」

滋賀大学教育学部附属中学校3年 中瀬 翔貴

「片親のやつはヤバいやつしかおらん。」塾の休憩時間の時だ。その言葉を聞いた瞬間、ざわざわしていたはずの教室が静かになったような気がした。大勢でしゃべっていたので誰が言ったのか、そこでどんな会話をしてこの言葉を言ったのかはよくわからなかった。けれどすぐにまた笑い声と会話が耳に入ってきた。そして小さな声が出た。「僕も片親なんやけどな。」僕のすぐ側にいた友達の声だった。ボソッとだったので、おそらく僕と近くにいた数人にしか聞こえていなかっただろう。友達は悲しそうな表情に見えた。その時、僕の胸にどしんっとか何かのしかかったような重さがあった。でも僕は何も言えなかった。どうしていいのかわからず、ただ聞き流すような態度をとるしかなかった。そこで次の授業が始まり自分の席へ戻った。授業中もその事が頭から離れなかった。家に帰ってから、母に話をすると、とても険しい顔をしながら「きっと友達は傷付いたやろうな。片親とか関係ないやん。あんたは両親そろってるのに1年生の時はママが学校に呼ばれるような事もあったやん。親がいるいいひんはそれは関係ないやん」と言った。人を判断する基準はそんな事ではないと僕に教えたかったんだと思った。そして、「なんでその時すぐに気の利いたフォローをしてあげれなかったん？」と言われ、自分の心の弱さと未熟さ、大切な友達を守ってあげられなかった事に情けなくなり、胸が苦しかった。

人を判断する時に、家庭の形や、育った環境だけを理由にする事は間違っている。「〇〇だから」で決めつけるのは、その人の努力や優しさを無視している。実際、僕の友達は部活も勉強も僕より努力しているし、塾で同じ学校の人がない僕を、すぐに仲間に入れてくれたし、困っている時は助けてくれる。だからこそ、家庭の形だとか表面的な事で、良いとか悪いとかを判断してしまう事はとても悲しいと思う。人を判断する時に本当に大切な事は、その人自身の行動や人柄であり、それを自分の目でしっかり見ないといけないと改めて思った。僕は、頭で思った事をすぐに口にしてしまう。これは僕の短所だ。軽い気持ちで口にしてしまうので、悪気なく相手を傷付けてしまう事もよくあると思う。だからあの日の出来事は他人事ではなく、自分自身もよく考えなければならない問題だと感じた。もしかしたら、あの日大声で言った人に悪気はなかったのかもしれない。だけど悪気なく言った事でも人の心を大きく傷付け、言葉というナイフで相手の心をズタズタに切りさいてしまう事が

あるんだと思った。

僕と姉が生まれた時から誕生日や記念日に両親から「他人の心の痛みを分かる優しい人になってね」と願いを込めたメッセージをもらう。今まで僕はその意味をちゃんと考えてこなかった。ただどあの日、友達の悲しそうな表情を見てやっと分かったような気がした。他人の心の痛みに気付くというのは、相手の立場になって考え、言葉を発する前に相手はどう感じるのかと想像力を働かせないといけない。言葉は学校生活でも、ネットの中でもあふれていて、使う時は責任を持たないといけないと思った。相手の心に残るのは、幸せな一言かもしれないし、心がズタズタに切りさかれるナイフのような言葉かもしれない。何げなく口にした言葉が、相手を幸せにもできるけど、間違えば不幸にもしてしまう。「表現の自由」という権利があるが、自由には必ず責任が伴うという事を忘れてはいけない。

あの日の塾での出来事を思い出すたび、もし僕がすぐに何か気の利いたフォローができていたら、友達の心は少しは救われただろうか。そして何も言うことができなかつた事で友達の心はずごく痛かつたのではないだろうかと考えてしまう。もしあの日にタイムスリップをする事ができたら僕は言う。「そんな事は関係ない。僕にとって〇〇はめちゃくちゃ良いやつやし、大切な友達やで」と。この出来事を通して、僕は人の表面的な部分だけを見て、その人の人格を決めつけてはいけないという事を学んだ。僕はまだ未熟で、心も弱い。これからもたくさん失敗することがあるだろう。けれどそのたびに学び、人の心の痛みを分かる人へと成長していきたい。そして、誰もが家庭の形や育つた環境にとらわれず、一人の人間として尊重される社会になるように、言葉に責任を持ち、他人の心に寄りそえる大人になりたい。

【審査講評】

塾の休憩時間に筆者と友達が耳にした心ない誰かの言葉。その言葉によって、悲しそうな表情を浮かべる友達。母親の言葉によって、自らの心の弱さと未熟さを知る筆者。これらの出来事を通じて、筆者は言葉の持つ影響力、互いの人権を尊重する大切さを学び、他人（ひと）の心の痛みを分かる人へと成長していきたいと決意します。

両親から誕生日や記念日に送られる「他人（ひと）の心の痛みを分かる優しい人になってね」との願いを込めたメッセージの意味を改めて考え、あの日、行動できなかつた後悔とともに、大切な友達への想いが綴られており、中学生らしい、さわやかな感性がうかがわれます。

また、誰しもが経験するかもしれない、思いがけず、自身の周りの人が傷つくような出来事について、誠実に、確かな人権感覚をもって、「誰か」のことではなく、自分自身の事として捉えている姿は、人権を

尊重することの大切さに気付かせてくれます。

これからも、「他人（ひと）の心」に寄り添い、更なる人権感覚を身に付け、人を思いやる気持ちが、筆者だけでなく、周りの多くの人達に広がっていくことを期待せずにはられない作品です。

大津地方法務局長 西岡 典子

【滋賀県人権擁護委員連合会会長賞】

Mさんとの出会い

大津市立瀬田中学校1年 山本 梨衣奈

夏休み、関西万博のイタリア館に並んでいた時、私たち母娘の前に並んでいた外国の男性から声をかけられた。彼は、アフリカのアルジェリア出身でベルベル人の方だった。Mという名の人で、フランスからはるばるやってきた娘さんの案内をしていたようだ。きっと娘さんがいたことで、私たち母娘にも声をかけてくれたのだと思う。

母が英語で話しているうちに、私の名前「リーナ」という響きが、アラビア語で「若いヤシの木」と同じ響きであることを教えてくれた。すっかり意気投合し、イタリア館を一緒に回った。Mさんが絵画の解説をしてくれたり、写真を撮りあったり、楽しい時間を過ごした。

イタリア館を出る時、Mさんが「アルジェリア館に来たらピンバッジをあげるよ。」と言ってくれた。なんと、Mさんはアルジェリア館のスタッフさんだったのだ。アルジェリア館に行くと、Mさんは非売品のピンバッジだけでなく、たくさんのお土産までくれた。お土産の中には、アルジェリアのお菓子も入っていて、私には甘すぎるくらいだったけれど、とても美味しかった。普段なら出会うこともないだろうけれど、万博という場だからこそ違う国の人と自然に交流できた。私は思いがけない親切にふれ、とても温かい気持ちになった。

次に万博へ行った時にもまたアルジェリア館を訪れた。Mさんは私たちを覚えていてくれて、今度はアラビア語で私と妹の名前を書いてくれた。見慣れない文字が右から左へと自分の名前を形づくっているのは不思議な感覚だった。

また、館内には美しい切手の展示が追加されており、一枚一枚にアルジェリアの歴史や文化が表現されていた。Mさんはその解説をしながら、笑顔で案内してくれた。遠い国であるはずのアルジェリアが、一気に近い存在に思えた瞬間だった。これまで「アフリカ」と聞いて思い浮かべ

るのは、ニュースで見た貧困や紛争のイメージばかりだったが実際にはこんなにも美しい国であることを知り、いつか訪れてみたいと思った。

Mさんがベルベル人であると教えてくれた時、私はそうなんだと思っただけだった。正直に言うと、その時ベルベル人について詳しく知らなかったし、それがMさんとの関わり方に影響することもなかった。家に帰ってからベルベル人について調べてみると、長い間言語や文化を軽視される差別を受けてきたと知った。それでも私にとって大切だったのは、Mさんが優しく声をかけてくれて、一緒に笑い合えたことだった。民族や出身地がどうであっても、MさんはMさんであり、一人の親切な人だった。そのことは、人は誰でも国籍や民族に関係なく、同じように尊重されるべき存在なのだという「基本的人権」の考え方そのものだと思う。

世界には今も、出身や外見が違っただけで差別を受けてしまう人がある。学校に通えない子どもや、働きたいのに国籍を理由に拒まれてしまう人もいると聞く。そうした現実を考えると、当たり前「人として大切にされること」は、決して全ての人々が得られてはいない権利だ。だからこそ、人権が守られる未来をつくることは、私たち一人ひとりの課題なのだと思う。

万博という国際的な場で、私は人との触れ合いの大切さを学んだ。言葉は完璧に通じなくても、笑顔で向き合う会話のやり取りから心は通じ合える。今もMさんの優しいまなざしが強く私の心に残っている。

私はこれからも、相手がどの国の人であっても同じ人間として尊重し、偏見を持たずに接していきたい。母がMさんと話していたように、私も世界の人ともっと交流するために英語を引き続き勉強していきたいし、もし周りで外国の人が困っていたら勇気を出して声をかけたい。そうした小さな行動の積み重ねが、人権を守ることに繋がると信じている。

この万博での出会いは、私にとって単なる素敵な思い出ではなく、「人権とは何か」を考えるきっかけになった。基本的人権とは特別なものではなく、日常の中で自然に守られるべきものだ。国籍や文化が違っていても、人は皆同じように尊重される存在である。そのことを胸に刻み、私はこれからも一人ひとりの出会いを大切にしていきたいと思う。

【審査講評】

令和7年4月から10月にかけて開催された関西万博で筆者はアルジェリア出身のベルベル人と出会った。ここでのふれあいを通して、筆者は改めて人権について考えるきっかけを得た。これまで「アフリカ」はニュースなどで貧困や紛争のイメージが強かったが万博での体験を通してこんなにもアルジェリアが美しい国であることを知った。さらにベルベル人について調べることによって長い間たくさんの差別を受けてき

たことも知った。国籍や民族に関係なく誰もが同じように尊重されることの大切さや、人権を守る未来を創ることが大切な課題であることに気づくことができている。今後も万博だけでなく外国の人とふれあう機会が多く訪れるだろう。今回得た経験を振り返り、英語の勉強を頑張ったり勇気を出して外国の人とふれあうことを目指してほしい。その時には、今以上に人権が尊重される世界になっていることを筆者とともに願う。

滋賀県人権擁護委員連合会長 向井 洋子

【滋賀県教育委員会教育長賞】

「思いやりの災害対策」

長浜市立高月中学校 1年 石川 七菜

私が朝、テレビを見ていると、津波注意報から突然、津波警報が発令されていることを知りました。日本で地震が起きたわけではなく、トカラ列島で起きた地震が大きかった影響で日本にも津波警報がでると思わなかったのが驚きました。テレビの画面には、海岸沿いの道路が少しずつ避難しようと車が渋滞していたり、立ち止まっている人に高台へ避難することをうながしているような姿が映っていました。私は、その人達が無事に避難出来ることを祈りながら見ていました。今朝もきつといつも通り、仕事などに出かけている家族や部活に行っている子供達がいたと思います。家族は別々の場所で避難をしなければならないと思いました。また、一人暮らしの老人や体の不自由な人が安全に避難ができるのだろうか、とても心配になりました。幸い日本には、大津波は来ませんでしたが、いつどこで地震などの災害にあうか分かりません。頭では、分かっているでも私自身には、まだ不安なことがたくさんあることに気がつきました。

そこで私は、地域の災害対策についてもう一度確認しようと自分が住んでいる市のハザードマップを見直すことにしました。改めて詳しく見ると、今住んでいる地域は周辺より地盤が粘土質で揺れやすい場所だと知り、不安が強くなりました。しかし、見ていくうちにハザードマップには、このように災害のリスクを認識しながら、適切に備えができるように分かりやすくイラストなどでしめされていました。だから、確認する前より災害について知識をしっかりとち、備えをしっかりとしていれば、必要以上にこわがらなくて大丈夫だと分かりました。

しかし、私には心配なことがあります。それは、となりの町に住む祖

母のことです。祖母は、車の運転はできますが走る事は難しいです。また、一人暮らしなので、もし助けが必要な時はすぐにつけられません。また、祖母が暮らす周りにもお年寄りが一人で住んでいたり和高齢な方が多くいます。もし、この集落で前触れもなく災害が起きたとき、素早く避難が必要になった時、どうすれば安全に高齢者が避難出来るのか心配です。私は、高齢者や障害を持つ人が避難が必要になった時の対策について調べてみました。

自分の力で避難が困難な人は、自治体の避難行動要支援者名簿に登録し、支援を事前に確認すること、そして、災害の時、警戒レベルが上がる前に早めに避難することなど体に負担がかからないことが大切です。さらに、事前の準備がとても、重要だとありました。例えば、事前に家の中の安全を確認して安全対策をする必要があります。それは、扉をふさがないように物を置かないことやすべりやすいところがないかなど確認し対策をしておくことなどいろいろなことが出来ます。また知人や家族間の連絡先の確認、いざという時に避難所を把握しておくことなどスムーズに行動に移せることにつながります。

お盆に家族や親戚が祖母の家に帰省した時、もし災害が起きた時の対策や確認をしました。祖母が気づかなかった危険な場所の確認や重たくて一人では動かせない物をみんなで配置を考えました。祖母が安心して、生活が送れるように、みんなで集まれた時に話し合う事ができて良かったです。夜には渡り廊下やトイレまで、薄暗い中を祖母の身になって、歩いてみました。昼間と違い足元が見えないと不安になりました。なので、もう一つセンサー付きの電気をつけたらいいのではないかと提案しました。早速、翌日に取り付けました。祖母がなかなかできないことを私たちが取り組むことで安全対策をする事ができました。祖母は、みんなに感謝していました。そして、とても嬉しそうでした。少し離れているとわからない事があると思います。改めて、親戚のみんなで地震だけではなく、さまざまな緊急時についても話し合う機会となりました。

祖母の体調が悪くなった時、普段飲んでいる薬や今までの病気の既往歴などを家族以外の人にも分かるようにノートを作成してみることもいいと思いました。そして、みんなが見えるところに置くこともいいと思いました。祖母が一人の時に困り事がないようにこれからもできたいです。

この夏も大雨による災害もありました。いつ自分が被災者になるかわからないなと思いました。まずは、自分の命を守る行動が大切で、命の守り方などについて考える事も必要です。そして、具体的な行動を考えると、実際に被害にあった時にどう行動をしたらいいか、見えてきます。でも一番大切なのは、人と人の助け合い、日頃からコミュニケーションをとって声かけをし、助けやすい関係を作る事が大切だと感じました。

【審査講評】

津波警報をきっかけに、「自助」としてのハザードマップの確認、そして「共助」としての祖母への安全対策へと、行動が広がっていく過程が丁寧に描かれています。災害を自分事として受け止め、深く考え、行動している姿に深く感心しました。

特に、家族や親戚とで祖母宅の危険箇所を確認し、家具の配置換えを行ったエピソードは、単なる知識だけでなく、祖母を大切にしたい思いを具現化された素晴らしい事例です。そして、有事の際は、日頃からのコミュニケーションが円滑な共助につながることに気づき、その大切さを訴えています。

「自分の命を守ること」と「人と人が助け合うこと」、そして「人と人が豊かにつながることはまさに、「自他をかけがえのない存在として尊重する」人権の考え方に通じるものです。災害対策における人権尊重の意識と実践的態度が明確に提示されており、非常に示唆に富む、優れた作品です。

滋賀県教育委員会事務局人権教育課長 小林 久祥

【NHK大津放送局長賞】

ふつうって、なんだろう

長浜市立木之本中学校3年 本多 すみれ

「ふつう」って目に見えない決まりごとのようだ。誰が決めたのかもわからないまま、私たちはそれに従っている。私が思うに、「ふつう」とは、多くの人が経験をもとに作り上げた「常識」のようなものだ。

私たちは日常の中で、「ふつうはこうだよ」「それくらいふつうできるでしょ」と言いながら、知らないうちに“ふつう”を定義している。そしてその“ふつう”から外れるたびに、人は生きづらくなってしまふ。

見た目ではわからない違い、うまく言葉にできないもどかしさ。それらは「理解しにくいもの」として片づけられ、誤解や偏見の対象になる。そうした空気が、この社会にはまだ残っている。

私には、自閉症の兄がいる。兄は、自分の気持ちを言葉にするのが苦手だ。何かを伝えたくても、すぐに言葉が出てこなかったり、途中で止まってしまうりする。伝えたい思いがあるのに伝えられない。そのもどかしさを、兄はずっと抱えているのだ。

けれど、兄に感情がないわけではない。嬉しいときは笑い、悲しいと

きは眉をひそめる。好きなもののお話になると目を輝かせ、予定が急に変わると不安そうになる。兄なりのペースやルールの中で、毎日を大切に生きている。私は、そんな兄の姿を見てきたからこそ、「ふつう」や「当たり前」という言葉に、いつもひっかかりを感じてしまう。

朝起きて、制服に着替え、学校へ行く。授業を受け、休み時間には友だちと楽しくおしゃべりをする。家に帰って宿題をして、明日の用意をする。多くの人にとって当たり前に見えるこの流れも、兄のように変化に不安を感じたり、人とのやり取りが苦手だったりする人にとっては、決してふつうではない。それでも社会は、「みんなと同じであること」を求めてくる。

社会には目に見えないルールのようなものがある。「こうするのがふつう」「これくらいできて当然」といった“常識”という名の無言の圧力のなかで、人たちが行動や表現は「変わっている」とされてしまう。兄も、「なんか変だね」と言われたり、距離を置かれたりしてきた。ほんの少しちがうだけで、なぜ人はこんなにも生きづらくなるのだろうか。

私たちが「ふつう」だと思っていることは、本当に誰にとっても「ふつう」なのだろうか。多数派の価値観だけを基準にして、そこから外れた人を排除するような社会は、誰にとってもやさしくない。そう気づいたときから、私は兄のような人がもっと安心して暮らせる社会にしたいと思うようになった。

人権とは、一人ひとりがその人らしく生きるための権利だ。見た目や話し方、行動が違って、それぞれのやり方が認められるべきだと思う。兄が言葉で気持ちを伝えるのが難しいなら、私が耳を傾け、表情や動きの中から受け取ればいい。伝え方が違うだけで、その思いの重さは変わらない。

私が兄にしてきたことは、特別な支援ではない。ただ、「わからない」からこそ決めつけず、そばにいて、時間が経っても、一緒に考えること。そうした小さな積み重ねが、人と人とのあいだにある壁を少しずつ崩していくのではないかと思う。

だからこそ、私たちはもう一度立ち止まり、「ふつうとは何か」という問いにしっかり向き合う必要がある。そこから新しい理解とまなざしが生まれ、誰もが安心して自分らしく生きられる未来が始まっていくと思う。

兄と過ごす中で、人にはそれぞれ違う感じ方や考え方があることを深く知ることができた。「ふつう」に当てはまらない人を遠ざけて、見えない壁を作る社会は、誰にとっても苦しいものになる。

“ちがいが”を否定するのではなく、そのままの姿を受け止める社会こそ、私たちが目指すべき場所なのだろう。「ふつう」という基準だけで判断せずに、違いを受け入れ、多様な価値観を尊重すること。それが誰に

とっても生きやすい社会をつくる第一歩であると感じている。

【審査講評】

「ふつうって目に見えない決まりごとのようだ…」。印象的な書き出しから始まるこの作文は、障害のある人と共に暮らすことの意味を改めて考えさせてくれる作品でした。自閉症の兄を持つ作者は、兄に寄り添いながら、優しいまなざしで、兄の中にある「ふつう」をずっと見守ってきました。そして「ふつう」とは何かを読者に問いかけます。自閉症の兄は感情を上手く言葉に出来ない、でも「伝え方が違うだけで、その思いの重さは変わらない。」という言葉が、その高い表現力とも相まって、私の心を揺さぶります。「ふつうでない」と決めつけず、時間がかかっても共に考え、ありのままの姿を受け入れる社会こそ目指す場所なのだとして作者は強く訴えます。障害は、誰もが「ふつう」に持っている個性の一つなのだとして認めあえる社会が来ればいいな、そんな思いを私にも抱かせてくれる素晴らしい作品でした。

日本放送協会大津放送局長 湯川 雅史

【京都新聞賞】

たった一言の重さ

長浜市立北中学校2年 杉野 心咲

「あなたは、今まで誰かを言葉で傷つけてしまったことはありますか？」私は、この問いに「ない」と言い切ることはできません。なぜなら、私が発した言葉で相手の心に深い傷を残してしまったことがあるからです。そのときの私は、少しイライラしていて、口調が強くなってしまいました。相手にとって私の発した言葉は、きっと強くて怖かったと思います。私はすぐに「やってしまった」と思いましたが、この言葉を取り消すことはもうできませんでした。この出来事をきっかけに、私は言葉の力について深く考えるようになりました。

私が言葉の力を実感したのは、仲の良い友達とのある出来事がきっかけでした。

ある日、別の友達から「あなたのこと『うざい』と言ってたよ」と伝えられました。私はその言葉を聞いた瞬間、とてもショックで、心臓がギュッと掴まれたような気がしました。悔しさと悲しさと不安が一気に

押し寄せてきました。何もしていないのに、どうしてそんなふうに見えるんだろう。頭の中がごちゃごちゃして、心がざわざわしました。

その日の下校中、私はイライラした気持ちを抱えたまま友達と二人で歩いていました。いつもなら笑いながら話す道なのに、その日は全然声が出ませんでした。すると、その友達が私の様子を見て、「なんか気まず」と言いました。その一言にカッととなった私は、思わず強い口調で「何が気まずいねん」と言っていました。

その一言を言ったあと、空気が一気に重くなったのを覚えています。周りの景色や人の声も遠くに感じられました。友達は黙り込み、私は何も言えなくなりました。沈黙のまま歩く帰り道、今までで一番長く感じました。心の中では、「言わなきゃよかった」「イライラした気持ちをなんで抑えきれなかったんだろう」と何度も後悔したけれど、一度口に出した言葉はもう消すことができません。たった一言で関係が壊れてしまうことを、そのとき初めて思い知りました。

それから少しずつ、友達との距離は広がっていきました。話しかけても返事が短かったり、話の輪に入れてもらえなかったり。気づけば、私は仲間外れのような状況になっていました。教室で一人で座っているとき、笑い声が聞こえるたびに胸がチクッとしました。まるで世界から置いてかれたようで、辛くて、悲しくて、泣きたい気持ちでいっぱいでした。あの子の言葉さえなければ、こんな思いをしなかったのに。私は自分の言葉を何度も心の中で責めました。

そんな辛い日々の中で、私を救ってくれたのもまた言葉でした。仲間外れのような状態が続き、休み時間も一人で過ごしていたとき、別の友達が私にそっと声をかけてくれました。「大丈夫？ 私たちと話そー！」その一言は、胸の奥まで温かく届きました。まるで心に差し込んだ光のように、重たく沈んでいた気持ちが少し軽くなりました。自分はひとりぼっちじゃない。ちゃんと気にかけてくれる人がいる、そう思うだけで、涙がでそうになるくらい嬉しかったのを今でも覚えています。

その日をきっかけに、少しずつ気持ちが前向きになっていきました。言葉は目に見えないけれど、心に深く届く力があると実感しました。そして、私もいつか、落ち込んでいる誰かにそっと寄り添える言葉をかけられる人になりたいと思いました。

私は、この体験を通して、言葉は大きな力を持っていると改めて実感しました。言葉は、人を深く傷つけることもあれば、優しく助けることもできる。言葉はまるで、ナイフにも光にもなるのだと思います。だからこそ、私はこれから、誰かを傷つける言葉よりも、誰かを笑顔にできる言葉を選べる人になりたいです。

言葉は一瞬で消えるように見えて、心には長く残ります。私の心に残った悲しい言葉も、救ってくれた優しい言葉も、きつとずっと忘れな

いでしょう。これからは、自分の言葉が誰かの心にどう届くのかを考えた
ながら生きていきたいです。言葉の力を信じて、人と人が思いやりを持
てる関係を自分から作っていかうと思います。最後に、この体験を通し
て言葉の大切さに気づけて本当によかったなと思います。

【審査講評】

家族や友人にひどい言葉を投げつけ、傷つけた経験は誰にでも思い当
たるのではないのでしょうか。作文を読んで、40年以上前の10代の頃
を思い出し、心の傷跡がうずきました。

筆者は、周囲の誰かから「うざい」と言われていることを聞いて
ショックを受けます。下校中、イライラしたまま友人の一言にかっとき
て強い口調で反論し、2人の仲に距離ができます。つらい日が続く中、
助けてくれたのも言葉でした。

言葉は〈ナイフにも光にもなる〉との指摘は鋭いと感じました。自分
の体験を通して、言葉の力を論じたまとめ方は説得力がありました。交
流サイト（SNS）上では「言葉の暴力」が問題になっており、人権侵
害や事件にも発展します。「言葉はナイフになっていないか?」。常に
みんなで議論し、考えていきたいものです。

京都新聞社滋賀本社編集局コンテンツ編集部長 多和 常雄

【BBCびわ湖放送賞】

「目に見えなくても」

長浜市立西浅井中学校1年 竹内 碧海

多くの兄は、中学校三年生の二学期のある日、突然言葉が話せなくな
りました。朝いつも通り登校する準備をしていた時、何か違和感を覚え
た母が話しかけたところ、兄は胸のあたりで声が止まってしまって上手
く話せないこと、体も思うように動かないこと、少し前からどこかいつ
もと違う感じがして不安だったことなどを訴えたそうです。その日は学
校を休んで病院に行くことになりました。

病院で検査をした結果、身体的にはどこも異常はありませんでした。
あと考えられるのは精神的なことが原因かもしれないとのことで、専門
的な先生のカウンセリングを受けたところ、兄は「解離性障害」と診断
されたそうです。それ以降、兄は体調が良くない日が続き、学校に行き

にくいことが多くなりました。

ぼくは、兄の病名や症状を聞かされた時、あまりよく理解ができませんでした。なぜ声が出ないのだろう、なぜ体が自由に動かないのだろう、なぜ学校を休んだり早退する日が増えたんだろう。兄のことを少しでも知ろうと思い、病気について調べてみました。

解離性障害とは、「自分」と「記憶や意識」が分離してしまう病気です。原因などによって種類がいくつかあり、症状も個人差があるようです。周囲には理解されにくい不思議な体験をしているようで、不安を抱いている人が多いそうです。

兄の場合、体調に波があり、感情の浮き沈みも激しく、体調が悪い時は夜眠れなかったり頭痛や幻聴の症状に苦しんでいました。声が出ない状態は約二か月半続きましたが、その間は筆談かジェスチャーでコミュニケーションを取りながら、家族でいつも通り過ごすことを心がけていました。体調が落ちついている時は、一緒にゲームをしたりキャッチボールをしたり、今までと変わらない兄の姿がとてもうれしかったです。

何かのきっかけで声が出るようになった兄は、言葉で話せることがこんなにも便利なことだったんだと実感したそうです。ぼくたちは普段あたり前のように言葉で会話していますが、筆談やジェスチャーだけでは上手く伝わらなかったり時間がかかって大変だったりということは、実際に体験してみないと気づけなかったことだと思います。ぼくも久しぶりに兄の声を聞いた時、とてもうれしかったのを覚えています。

兄は自分ではコントロールできない苦しい症状と闘いながら、学校行事や勉強、高校受験を乗り越えてきました。本人のがんばりはもちろんですが、家族や友だち、先生方といった周りのサポートがとても心強かったと兄は言っていました。

兄のような精神的な病気は、目には見えません。病状を伝えるにくだろうし、周りも気付きにくく理解するのに時間がかかると思います。でも、病気のことを知らないからとかわからないからではなく、世の中には様々な立場の人たちがいるということを理解し、少しでも寄り添える思いやりを持って接することで、苦しんでいる人や生きづらく感じている人たちが心やすらぐ環境作りにつながるのではないかと思います。ぼくも兄のことがなければ、何も知らないままでした。身近で感じられたからこそ気付けたことだと思います。

目に見えない病気や障害は、他にもたくさんあります。ぼくは最近、ヘルプマークについて知りました。ヘルプマークとは、外見からは援助等を必要としていることがわかりにくい人が携帯し、いざという時に必要な支援や配慮を周囲の人たちをお願いするためのものです。身近な人が所持していて、実物を見せてもらう機会があり、知ることができました。それからは外出先で時々ヘルプマークを目にすることがあり、知識

を持って周りを見わたすとこんなにも病気や障害を抱えた人たちがいるんだということに気がきました。

本当の痛みや苦しみは、本人にしかわかりません。話を聞いても理解しがたいこともあります。でも、だからと言って知らないふりをするのではなく、周囲の人たちも正しい知識を持って、見た目だけで判断せず理解を深めて寄り添うことで、だれもが生きやすい環境を作ることができるのではないかと思います。

兄は今も病気と闘っています。自分の病状を理解し、しっかり向き合っていて、苦しい中でも新しい高校生活や大好きな野球を、自分のペースで楽しんでいるようです。ぼくは、そんな兄のことをとても尊敬しています。そしてこれからも自分のできる限りのサポートを続けていきます。

【審査講評】

大切な兄が心の病になる。困惑の状況の中で、筆者は取るべき姿勢を学んでいく。文中からは随所に兄弟仲の良さがにじむ。それだけに兄が解離性障害の診断を受けた現実が、筆者をどれほど心配させ、不安にしたかは想像に難くない。しかし筆者は慌てず寄り添う。この病への対応に欠かせないのが、周囲の理解だと聞く。本人が、自分ではどうしようもない状況に苦しむ中、暖かく寄り添うことが必要となる。筆者はそれを実行しつつ、当事者らに共通する悩みや、周囲への感謝など、大切なものに兄と一緒に気づいていく。そして「病気を知らないから、ではなく、理解し思いやること」を指摘する。確かに、多くの人が「知ること」で行動を変えるだろう。紹介されたヘルプマークなど、今後、同世代にも伝えてくれたらうれしい。作品の読後感は闘病記のそれではない。温かな家庭を軸に、兄弟2人が歩む姿が描かれた「成長記」だ。

びわ湖放送株式会社制作部部長 大口 隆之

【KBS京都放送賞】

支援級について

守山市立守山中学校2年の生徒の作品

私がこの作文を書こうと思ったのは、支援級に入っている人達のことを、知ってほしいからです。

支援級は、障害のある生徒が学習上、生活上の困難を克服するために受けるというものです。支援に入っている人達は、発達障害や精神疾患

をかかえている人が多いです。私の場合、小さい頃から他の人より成長スピードが遅いという理由で、小学校へ入学したときから入っています。でも、中学校へ入学すると共に、不安になりました。

中学二年生の一学期の後半くらいから、私は思いました。「交流級の人達は、支援級に入ってる人達のことをどう思ってるんだろう。」と、そして、私が小学三年生の頃に友達に言われたことを思い出しました。

私が小学三年生の頃、クラスの学級委員みたいなのを決めるとき、私もやってみたいと思い、手を上げました。でも、となりの席の友達に「支援に入ってるから無理。」と言われました。そのときは他の友達に注意してくれましたが、私はその一言で、自信をなくしました。それから、意見を言うのも、手を上げるのも怖くなりました。誰かに何かを言われるのが怖くなったからです。当時の私にとって、その言葉は、とても心に刺さりました。

支援級のメリットは、少人数で授業を受けることができ、先生のサポートもありながらゆっくり勉強することができます。一方で、デメリットは、交流級の生徒との会話などが少なくなったり、教室と支援級の教室の移動に距離や時間がかかってしまうことですが、支援級に入っている人達にとって、支援級の教室はとても安心できる場所であり、交流級の人達とあまり話せなくても、支援級の人達と仲良く話すことができます。

次に、支援級ではどんなことをしているのかを紹介します。授業は教科ごとに別々の先生が担当し、生徒達に分かりやすく教えてくれます。教科の勉強以外にも自立活動というものがあります。自立活動とは、障害による学習上、生活上の困難を克服するために必要なことです。具体的にすることは、コミュニケーション能力を向上するために、カードゲームをしたり、ホワイトボードを使って、自分の考えを書いてみたり、姿勢維持のために腹筋をしたり、体力をつけるために、筋トレをして、何回できたかを測ったりします。後は、テスト前のときは、ワークを進めたり、自分の悩みを話したりします。先生達も優しく接してくれるので、どうしたらいいかや、自分はこうしたいや、自分の思いを話せるし同じ支援級の生徒達と仲良くできます。

最後に、みなさんに伝えたいことは、支援級に入ってるからと言って、なににもできないと思って、仲間はずれにしたり、どうせ無理だと決めつけないでください。最初にも書いたとおり、支援級に入ってる人達は、生活上・学習上の困難を克服するために受けているのです。それを交流級の生徒達は見てないだけで、勝手に無理だとか、できないなど、勝手に決めつけられたら、とても悲しい気持ちになり、時には自信をなくしてしまうこともあります。それは交流級でもいっしょです。あの人は優しいからってなににしても良い訳じゃないし、その場で言った言葉が、自

分が悪気がなくても、相手には深く傷ついてしまうこともあります。他にも、軽い気持ちでいじったり、冗談で相手が傷つく言葉を言ってしまったら、軽い気持ちでも相手が傷ついてしまい、時には何かをすることが怖くなったり、その人と関わるのが怖くなってしまうことがあります。

ここまで書いて、みなさんに覚えてほしいことは、支援級の人達を差別したり、こうだからって仲間はずれにしたり、絶対できないと思わないでということです。障害を持っている人達は、みなさんの見えないところで、たくさんの困難を克服するための勉強や自分の考えや思いを言えるための授業を受けたり体力をつけるための努力をしています。だから、支援級に入ってるからって、なにもできないと思ったり、仲間はずれにしたりしないでということです。支援級の人達は、交流級の人達と少し違うところがありますが、支援級に入ってる私は、交流級の人達とも仲良くしたいと思っています。この作文をきっかけに、交流級の人達と仲良くできたらいいなと思っています

【審査講評】

「支援級について知ってほしいことがあります」で始まる一連のエピソードは、支援級に在籍している筆者自身の話であり、同級生の一言が、さながら静かな水面に大きな石を投げ込んだような波紋を引き起こしているように感じました。

周囲と共に過ごしたいという一生懸命な行動が拒否され、周囲と共に過ごす努力が怖くなり、周囲と距離を置くようになる、という負のスパイラルに陥った様子や、周囲と共に過ごすために目に見えない努力の過程が筆者の等身大の表現で熱く伝わってきました。

今回、筆者自身の悲しい体験を通じて発信してくれた、目に見えない努力を、誰しもうかがう必要があると改めて痛感するとともに、我々も何ができるのか考えさせられました。

株式会社京都放送滋賀支社長 森永 貴則

【審査員特別賞】

「なんで謝るんだろう」

大津市立仰木中学校 2年 竹中 颯花

私は何かあったときに誰かに謝られても、あまり気にしないけど「なんで謝るんだろう」って思ったことが一回だけありました。

それは私が小学五年生のときに家族で山登りに行ったときのことです。みんなで山の坂道を登っていたら前から大人が二人、歩いて来ました。そのうちの一人は大きな声で「あーあー」と言っていました。私のお母さんは私の弟に発達障がいがあることをきっかけに障がい児の放課後デイサービスの代表をしていて私もよくその子供達と遊びに行きます。なのでその「あーあー」と言っていた人も「なにかの障がいがあるのかな」と思いました。その人のとなりにはお父さんみたいな人が歩いていました。お父さんみたいな人は「すみません」と何回も言いながら通りすぎていきました。私はそう言われて「なんで謝るんだろう」って思いました。なぜならその人は誰にも迷惑をかけていないし、何も悪いこともしていなかったからです。意味もなく「あーあー」って言ったんじゃないくて、本当は「山登りが楽しい」や「山の風が気持ちいい」とかの気持ちを表現するために言っていたのかなって思います。私とは表現の仕方が違うけど人それぞれ自分なりの表し方があるので、違うのはあたりまえです。それと私も、私の周りのみんなも、楽しんでいることに謝っていないです。なのでそのお父さんも楽しんでいることに謝らなくていいし、楽しむことに謝るのは変だと思います。

謝られた時、お母さんは「全然いいですよ！」と言いました。でもその日の帰りくらいにお母さんは「あの時（全然いいですよ）だけじゃなくて（山登り楽しいね）や（楽しそうですね）とかもって違う言葉を付け足しとけば良かったな」と後悔してることを話してくれました。私はそれを聞いてただ大丈夫って受け入れるだけじゃなくて、相手がうれしくなるような言葉をかけるのも大事だなんて思いました。

他にもこの出来事を作文に書くことになったとき、あまり覚えてないところをお母さんに詳しく話してもらいました。その時にお母さんが思う、なんでお父さんが謝ったかの理由を教えてくださいました。それは「お父さんは周りの人にその子のことを理解してもらえないんじゃないかと心配したからなのかも。それか、今までに変な目で見られたりして嫌な思いをしたから、それを防ぐために謝ったのかもしれない。」の二つです。どれが本当の理由かは分からないけど、どっちにしても人権に関わることだだと思います。

だけど私は人権のことは学校で習ったことしか知りません。なので自分で調べてみることにしました。調べてみると人権とは、「人が人として自由に考えたり行動したり、幸せに暮らすために生まれながら持っている権利のこと」だと分かりました。今まで学校では習わなかった人権の具体的な内容や課題、「人権を守る、尊重するとは」なども知れました。そして「人権を守ったり尊重する」ためにはまず相手の立場や状況、人権についてを正しく理解することが大事だと分かりました。

相手の事を理解することが大事だと分かったので「違ってもいい」と思えるようになりたいです。もしこれからあの山であったようなことがあったら「楽しそうですね」とか言えるといいなって思います。

【審査員特別賞】

「違いをこえて、つながる社会へ」

甲賀市立水口中学校1年 小椋 理衣

私が六年生のとき、同じ学年に支援学級に通っている子がいました。普段は別の教室で勉強していて、私たちの教室には時々しか来ませんでした。最初は「特別な勉強をしているんだな。」と思っていましたが、どんな子か知りませんでした。

ある日、友達と一緒に支援学級に遊びに行く機会がありました。少し緊張しながら教室に入ると、その子が笑顔で迎えてくれました。思っていたよりもずっと明るくて、普通に話していて、私たちと同じように楽しそうにしていました。そのときに一緒に遊んだのが、「ナンジャモンジャ」というカードゲームでした。

「ナンジャモンジャ」は、カードに描かれた不思議なキャラクターに自由に名前をつけて、同じキャラが出たらその名前を叫ぶというゲームです。最初の一枚に描かれていたキャラに、友達が「もじゃもじゃたいよう」と名付けると、みんなが笑い出しました。次に出てきたキャラには、私が「オレンジ」と名付けました。その子も「ツインテール」など、ユニークな名前をつけていて、私たちは何度も笑い合いました。

その子が名前を叫ぶときの声は、思っていたよりも大きくて、はっきりしていました。私は驚きながらも嬉しくなりました。「支援学級に通っているから静かな子だ。」と勝手に思い込んでいた自分に気づき、恥ずかしくなりました。その子は、私たちと同じように話して、笑って、遊んでいたのです。

それから私は、休み時間にその子と遊ぶことが増えました。「ナンジャモンジャ」だけでなく、折り紙やトランプも一緒に楽しみました。言葉が少ない日もあったけれど、目が合ったときの笑顔や、カードをめくるときのワクワクした表情が、私には何よりも嬉しかったです。

ある日、私が「このキャラの名前、何にする？」と聞くと、その子は少し考えてから「まくらパンダ」と答えました。私は「いい名前！」と笑いながら言うと、その子も照れくさそうに笑っていました。その瞬間、私は「名前を呼ぶこと」が、ただのゲームのルールではなく、心を通わせる方法になっていることに気づきました。

また別の日、体育の前の休み時間にその子が体育館かグラウンドのどちらに行けばよいのか迷っているのを見かけました。私は「こっちだよ。」と声をかけました。返事はなかったけれど、静かにうなずいてくれたその姿に言葉がなくても気持ちは伝わるのだと感じました。

人権とは、そうした一瞬一瞬の中にあるのだと思います。これからも私は、誰かの不安に気づき、そっと手を差し伸べられる人でありたいです。そして、誰もが安心して自分らしく過ごせる世の中であってほしいです。支援学級に通っている子も、私たちと同じように、笑いたいし、遊びたいし、認められたいと思っているはずです。その気持ちに気づくことが、人権を守る第一歩だと思います。

私はこの経験を通して、「知らないこと」「わからないこと」に対して、勝手な思い込みで距離を置いてしまっていたことを反省しました。違いを受け入れるには、まず相手を知ろうとする姿勢が大切なのだと思いました。

これからの社会が、誰もが安心して自分らしく過ごせる場所であるために、私たち一人ひとりが、相手の立場に立って考え、そっと寄り添える存在になっていくことが必要だと思います。支援学級という言葉だけで距離を感じていたけれど、実際に関わってみると、たくさんの共通点があることに気づきました。そして、違いがあるからこそ、学ぶこともあるんだと思います。

これからも私は、誰かが静かにしているとき、「話したくない」のではなく、「話すのが難しい」だけかもしれないと考えたいです。そして、そんなときこそ、そっと寄り添える人でありたいと思います。

一人ひとりが違いを認め合い、互いに支え合える社会。それが私の目指したい未来です。小さな気づきや優しさが、きっとその一歩になると信じています。

名前を呼ぶたびに、心が近づいたあの時間を、私はずっと忘れません。

【審査員特別賞】

ちがっていてもつながっている

愛荘町立愛知中学校1年 岡島 快斗

私には、知的障害のある妹がいます。妹は私より六つ年下でほかの子たちと比べたら、少しおくれてる部分もありますが、いつも明るく、元気で、いつも笑顔で私を元気にしてくれました。うまく言葉を言えなかったり、うまく表現できなかったりすることが多かったです。でもそんな妹は私にとって、かけがえのない存在です。

小さい頃、私は妹の障害についてよく理解していませんでした。ただ同じ年頃の子と比べて話すのが同じ言葉ばかりだったり、感情の起伏が激しかったりすることに、なんとなく違和感を覚えていました。家族は、「ほのかはちょっと人と違うところがあるけど、それも個性だから大事にしてね」と教えてくれましたが、子どもの私にはそれを深く理解することができませんでした。

そんなある日、公園で妹と遊んでいた時のことです。滑り台の順番をならんでいるときに前の子をたたいたり、かみの毛をひっぱったり、周りの子たちからは、「この子変じゃない？この子やばー」と言われました。その言葉に、私はとてもショックを受けました。妹が、まだ分からなかったのだと思う部分もありましたが、周囲の子たちからは、「おかしい」と見られる。妹が少し違うだけで、こんなにも厳しい目で見られてしまうのかと初めて強く感じた瞬間でした。

それから私は、少し妹の障害について学ぶようになりました。母や学校の先生、特別支援の先生から「知的障害とは何か」「どんな支援が必要か」などいろいろなことを教えてもらいました。知的障害とは、知的な発達が平均よりおくれていて、理解力や判断力、言葉の使い方などに困難がある状態のことです。しかしそれは、ただの「特性」であり、「悪いこと」ではないのです。

妹にも得意なことがあります。たとえば、ダンスの振り付けを覚えたり、アンパンマンの歌詞を覚えたりなど妹にも得意なことがあるのです。そして知らない人でも一緒に遊んだり、妹流のおもしろい遊び方を見つけ、遊んだりしています。

でも、社会は、妹のような人にとって、やさしい場所ばかりではありません。外出先で、妹が急に大きな声を出したり、パニックになってしまったりすると、周りから冷たい目で見られたり、わざと距離をとられたりすることがあります。そうした場面に出くわすたび、私は、「なんで分からない人だろう」と思ってしまう。妹は、ただうまく言葉

にできていないだけなのに、なぜ距離をとったりするんだらうと不快に思います。それを理解してもらえないのが残念です。

私は、もっと多くの人に「見えない障害」の存在を知ってほしいと思っています。車いすを使っている人や白杖を持っている人は、見てすぐに「何か支援が必要だ」と分かるかもしれませんが、知的障害や発達障害などの「見えない障害」は、外見では分かりにくく、誤解されやすいです。だからこそ、「見えないから存在しない」のではなく、「見えないからこそ想像すること」が大切だと思います。

妹と一緒にいることで、私は、「人を思いやる心」や「違いを受け入れる大切さ」を学ぶことができました。最初は、戸惑うこともたくさんありましたが、妹が私に教えてくれたことは、他人と比べるのではなく「その人自身を見ることの大切さ」です。障害があるからと言って価値が下がるわけではありません。誰もが誰かにとって大切な存在であり、かけがえのない命なのです。

学校でも妹のことで話題になっていることがありました。妹がみんなに暴力をふるったりとか、遊んでやあるおもちゃをとったりしてけんかなどがおこってしまっていました。でも「その子に合った教え方をしているだけだよ」とちがいがあるのはふつうのことなんだよと教えてあげました。納得した友達の表情を見て少しうれしくなりました。理解の輪が広がっていけばいいなと思いました。

妹は、私にたくさんの事を教えてくれました。人のやさしさ、思いやり、そして、「ちがい」を受け入れることの大切さ。それは、学校の教科書では、学べない、人生にとって本当に大切なことです。これからも私は、妹とともに成長しながら、一人でも多くの人に気持ちを伝えていきたいです。

【奨励賞】

国境を越えた思いやり

光泉カトリック中学校3年 山内 寧々

近年、日本に住む外国人の数は増加し、私たちの周りにもさまざまな国の人々が暮らすようになりました。学校やコンビニ、飲食店など、日常生活で外国人と接する機会は増えています。その一方で、外国人に対する差別や偏見といった人権問題も多く存在しています。SNSなどでヘイトスピーチが拡散されることもあり、外国人が社会の中で安心して

て暮らすことが難しくなっています。

私には現在、国内外に外国人の友達がたくさんいますが、初めてできたのは幼稚園の時です。彼女はブラジルから引っ越してきたばかりで全く日本語が話せませんでした。私たちはすぐに一番の仲良しになりました。砂場で泥だらけになりながらたくさんの砂山を作ったり、園庭を走り回ったりして遊んだことは今でも私の記憶に残っています。彼女が手作りしてくれたクリスマス飾りやおひなさまは今でも私の宝物です。言葉は通じないけれど、お互いいつも無言のまま、ニコニコと楽しそうに遊んでいるのがとてもほほ笑ましかったと母から聞きました。彼女とは同じ小学校に進みましたが、生徒が千人以上いるマンモス校で一度も同じクラスになることはなく、いつの間にか遊ぶことはなくなりました。たまに見かける彼女は、言葉の壁だけでなく、文化の違いによる誤解や周囲からの偏見にも苦しんでいたように感じました。休み時間もぼつんと一人でいることが多く、私はその姿を見るたびに胸が痛くなりました。その後、彼女はブラジル人の多い地域へと引っ越していきました。

少子高齢化によって働き手が減っていく日本で、外国人は社会を支える大切な存在です。しかし、外国人が安心して日本で働くには、まだまだ多くの課題があると感じています。以前見たニュースで、日本に住む外国人の中には、適切な労働環境が与えられず、長時間労働や低賃金で働かされる人が少なくないことを知りました。日本語が十分に話せないことで、社会から孤立してしまう人も多いといいます。子どもたちも、学校でいじめにあったり、不登校になったり、言葉が理解できずに十分な教育が受けられなかったりする現状があります。外国人だから、言葉が通じないから、文化が違うから。そんな理由で差別されるのはとても悲しく、不公平です。日本以外の欧米諸国でも、アジア人を狙った襲撃事件、移民問題、外国人留学生の受け入れ拒否など、数えきれないほどの外国人差別が報道されています。国連の「世界人権宣言」には、人種、ことば、皮膚の色の違いによって差別されるべきではないと書かれていますが、実際は世界中のあらゆるところで人種差別が行われています。

私は、彼女の引っ越しをきっかけに、外国語を学び始めました。私にできる小さな行動として、困っている外国人を見かけたときは声をかけたり、助けたりするようにしています。ほんの少しの勇気と思いやりが、大きな変化につながると信じています。これから先、日本にはもっと多くの外国人がやってくるでしょう。ともに暮らす仲間として、私たち一人ひとりが意識と行動を変えていくことが求められています。私たちが生きる社会が、国籍や言葉に関係なく、誰もが尊重され、安心して暮らせる場所であってほしいと思います。そして私自身も、そんな社会を実現するためにこれからも行動し続けていきたいです。

【奨励賞】

「指先から生まれる責任」

甲賀市立水口中学校3年 三澤 真翔

僕にとって、インターネットは巨大な図書館や博物館のようなものでした。自分の知らない世界を教えてくれたり、趣味について深く知ることができたりする、とても便利な道具です。僕は、SNSや動画サイトに自分で何かを書き込んだりすることはほとんどなく、いつもは誰かが発信してくれる情報をただ静かに眺めているだけでした。それで十分に満足していました。

僕には、ある特定の分野で活動している人を、インターネットを通じて応援するというささやかな楽しみがありました。その人は、とても専門的な知識を持っていて、ブログでその知識を惜しみなく公開していました。僕はそのブログを熱心に読むことで、自分の興味がある世界がどんどん広がっていくのを感じていました。ブログのコメント欄は、いつもその人を尊敬する人たちの感謝の言葉であふれていて、とても温かい雰囲気のある場所でした。

しかし、ある日、その穏やかな場所の空気は一変しました。その人が、過去に書いた記事の一部分だけが、全く違う意図で解釈されてネット上で拡散されてしまったのです。いわゆる「炎上」というものでした。

僕がいつものようにブログを訪れると、コメント欄は見たこともないような荒れ方をしていました。そこには、感謝の言葉の代わりに、その人の人格を否定するような、ひどい言葉がびっしりと並んでいたのです。「知ったかぶりするな。」「業界から消えろ。」顔も名前も知らないたくさんの人たちが、まるでそれが正義であるかのように、一人の人間を攻撃していました。

僕はその光景に、ただただ恐怖を感じました。画面に並ぶ無数の悪意のある言葉が、僕が尊敬していたたった一人の人間に、一方的に突き刺さっていくように見えました。僕にできることは何もありませんでした。もともと書き込みをする習慣がなかった僕には、その人を擁護する言葉を書き込む勇気も、方法も思いつきませんでした。結局、僕は何もできず、ただそのページを閉じることしかできなかったのです。

何も行動しなかった自分を、後から何度も責めました。ただ見ているだけだった自分も、このひどい状況を作り出した一人なのではないか。僕の無関心が、攻撃する人たちの行為を黙って認めてしまったことなのではないか。そんな思いが、ずっしりと心にのしかかりました。

この出来事を通して、僕はインターネットの恐ろしさを肌で感じまし

た。顔が見えないという匿名性は、時に人をととても無責任で、残酷にしてしまいます。現実の世界では決して口にしないようなひどい言葉が、ネット上ではいとも簡単に、そして何の罪悪感もなく使われてしまうのです。

僕たちにとって、インターネットはもう生活から切り離せないものです。だからこそ、その使い方と真剣に向き合う必要があります。特に僕のような「見るだけ」の人間も、決して無関係ではありません。悪意のある書き込みがあふれる場所をただ放置することは、その場の空気を悪化させることに繋がります。

今なら、僕にもできることがあると分かります。ひどい書き込みをサイトの管理者に通報する機能があることを知りました。それなら、直接反論する勇気がなくても、行動に移せます。あるいは、信頼できる身近な大人にネットで起きているひどい出来事について相談することもできずです。

僕たちは、便利な道具を手にはしています。しかし、その指先一つで、誰かの心を深く傷つけることもできてしまうのです。画面の向こう側には、自分と同じように感情を持つ一人の人間がいる。そのことを常に想像する力を持つことこそ、この便利な世界を誰もが安心して使える場所にするために、一番大切なことなのだ、僕は強く信じています。

【奨励賞】

「いじめのない社会」

甲賀市立水口中学校3年 亀井 勇杜

「たった一言が、その人の一日を変えることがある。」僕はこの言葉を聞いたとき、強く心に残った。嬉しい言葉なら、心が軽くなる。でも、傷つける言葉なら、その一日はもちろん、心に深い傷を残すこともある。その傷が何日も、何年も治ることがない。それが「いじめ」だ。

いじめは、からかいや悪ふざけに見えても、受けた人にとっては人権侵害だ。人は皆、生まれながらにして尊重されるべきであり、生きる権利がある。だが、学校やSNS、あらゆる場でいじめは起きてしまっている。

僕は、中学二年生のときに仲良しの四人組がいた。いつも四人で行動していた。しかし、そんなある日、僕は思いもしないような出来事が起

こった。体育祭が近くなった日、四人組で行う種目があった。いつもの四人組で体育祭当日を迎えられると思っていた。僕はハブられた。いつもの四人組で僕一人だけハブられた。偶然かなと思ったが、次の日も、その次の日も同じだった。気づけば、僕が近づくとひそひそ話をされ、遊びやおしゃべりの輪に入れてもらえなくなった。

休み時間は、席に座って時間が過ぎるのを待つだけ。笑い声が耳に刺さるようで、教室にいること自体が苦しかった。家に帰っても気持ちが晴れず、自分に自信が持たなくなっていった。

誰にも相談できずにいたが、このままではいけないと思い、母に本当のことを打ち明けた。「実はハブられている」と。母は「きっと良い事がある」と僕に言ってくれた。この言葉で、少し気持ちは楽になった気がした。しかし、学校へ行くと、またいつものように辛くて苦しくて、帰りたいという日々が続いていた。

僕は、いじめをする側の人は、何も人の気持ちを考えていなかったとしても、いじめをされる側は、人生を変えてしまうほどの辛さになってしまうことを改めて実感した。これはSNSの世界でも同じだ。SNSはもちろん、色々な人とコミュニケーションが取れ、自分に合った人をすぐに見つけられるすごく便利なものだ。しかし、最近の社会は悪口を言ったら傷つくといった当たり前のことに気づかないくらい忙しく回り続けている。

人権とは、「人が人らしく生きられることができる権利」だ。だから、人をハブいたり、悪口を言ったり、暴力はもつての他、このような言動は人権侵害にすぎない。

いじめがなくなるようにするには、僕は三つのことが大切になってくるのだと思う。

一つ目は、「相手の立場になって考えてみる」ということだ。自分がされて嬉しいこと、悲しいこと、それを見極めて行動すること。

二つ目は、「小さな勇気を出す」ということだ。小さな勇気だけでも、相手の心を救うことだってある。

そして三つ目は、「視野を広げる」ということだ。視野を広げてもっと物事を捉えることで、一人の人はいないか、ハブられている人がいないかに気づくことができる。

僕はいじめられたからこそ、今の自分があると思う。もし、いじめられていなかったら、人の気持ちを考えもせず発言していたかもしれないからだ。

僕は今、生徒会長をしている。生徒会長は学校全体がよりよくなっていくように視野を広げないといけない。また、小さな勇気を持って注意できる人でないといけない。このようなことに気づかせてくれたのもいじめがあったからだと思う。

「たった一言が、その人の一日を変えることがある。」ならば、僕はその人を笑顔で楽しく過ごせる一日になるような声かけをしたい。いじめのない社会は、そうした小さなことの積み重ねから始まるはずだ。これからも、勇気と優しさを持って、どんな人であっても、優しく振る舞えるような人になりたい。

【奨励賞】

「差別とこれからの社会」

甲賀市立水口中学校3年 辻 満輝

僕と一緒に住んでいる祖父は、今年で九十二歳です。祖父は入院してこの夏、退院する予定です。先日、退院準備のためケアマネージャーさんと、病院のリハビリ担当の人が自宅ですっかり過ごせるか、介護用品がいるか、危険な所がないか、見に来てくださいました。自宅は昔ながらの日本家屋で、土間や高めの敷居があります。そして、居間への上がり口に高い段差があります。段差が高いことは僕はなれていてあまり気にならなかったのですが、祖父にとってはとても危険な段差だと気づくきっかけとなりました。

今までも、商業施設の駐車場に車イスのスペースがあることや、病院などには自由に使える車イスが置いてあること、公共施設にはスロープがあることは知っていました。しかし、今回祖父は家の中でも車イスをつかうことになり、畳の上では自分ではうまく車イスを使えないのではないかと、車イスで移動できても、ポータブルトイレを使ってトイレをするのに手間や時間がかかるなど細かいところで配慮が必要になってくると気づきました。僕も、以前、脳梗塞になったときトイレの介助や移動を手伝ったことがあります。思っていたよりも力が必要で大変でした。でも、思うように体が動かず祖父も辛い思いをしていたんだと思います。この経験から、相手の立場になって考えないと分からないこともあり、相手の立場になって考えることが大切だと知りました。

高齢者の方や障害を持つ方にとって街や駅やお店など誰もが利用しやすい設備になっていたか、と改めて考えました。車イスで移動するとき段差や道の穴、金網、車輪のはまりやすいみぞ、車イスが通れる道の幅が気になることがあります。例えば駅で階段ではなく、車イス専用の通路で出入りできますが、一目見て分かりやすい表示になっているか。駅員の人に声をかけるのを、ためらってしまわないか考えました。僕が祖

父の近くにいと、「あれとって」「これとって」とよく声をかけられます。正直、少し面倒に思うこともありましたが、祖父にとっては一つ一つの動作がたいへんだったのかなと思いました。また、僕が祖父のたのみを聞いた後、いつも、ありがとうではなくごめんなといわれます。めいわくをかけてもうしわけない、家族のために動けなくてももうしわけない、と思ったのでしょうか。しかし、自分のことは自分でしたいたろう、周りの人のために動きたいだろう。一番辛いのは本人のはずなのに、僕はそう思うようになりました。それは、きっと高齢の方だけでなく障害をもつ方も同じだと思います。

以前、盲導犬についての本を読んだことがあります。盲導犬の一生についてや、利用者さんの思いについて書かれた本で、今まで考えたことのない視点に気付かされて、大変心に残ったことを覚えています。例えば盲導犬に近寄ってかまったりすることは利用者の行動を妨げることや、混乱させることにつながり、よくないということや、盲導犬は利用者さんの指示で動き、サポートしているので盲導犬と歩いておられても行きたい場所が分からず、困っておられることもあるということなどです。近年、こういった人達のためのバリアフリー化が進み、過ごしやすい環境になっています。しかし、環境だけでなく障害を持つ方に対する見方や接し方をかえないと、本当の過ごしやすい環境になりません。

人権とは、人が人らしく生きるために不可欠な権利のことです。生まれながらに持つ権利であり、誰でもどこにいても差別されることなく、尊重されなければなりません。差別という明らかな差をつけた扱いや、マイナスなイメージの行為はもちろんあってはならないことですが配慮が必要な人が不利になることなく過ごせる社会であることが大切だと思います。私は、人権についての問題はまずはみんなが知る努力をし、学ぶ姿勢をもつことが唯一のスタートだと思っています。そして、困っている人が気軽に困っていることを伝え、助けを求められる環境をつくっていくことが大切だと思います。様々な国、人種、立場、環境にいる人々がいる中で相手の立場も考えず自分の思いだけ主張していれば、分かりあえず戦争へと発展します。私達一人一人が、多種多様な人々の立場になって理解し、見方を変えてみるのが大切だと思います。

【奨励賞】

「みんなちがってみんないい」

匿名の生徒の作品

ぼくは、学校の先生から「人権作文を書いてください」と言われて、「人権ってなんだろう？」と考えました。テレビやニュースではよく「人権が大切です」と言ってるけど、ちゃんとした意味はよく知りませんでした。家に帰ってから、お母さんに「人権ってなんなん？」と聞いたら、「すべての人が幸せに生きていくために、だれにでもある大切な権利のことだよ」と教えてくれました。

それを聞いて、「たしかにそうだよな」と思いました。ぼくだけじゃなく、友達や家族や世界中の人にも、みんな同じように大切な権利があると知って、なんだかすごく広い世界のことを考えているような気持ちになりました。

ぼくのクラスには、体が弱くて、走るのがにがてな子がいます。リレーのときに、その子がバトンをわたす番になると、ちょっと不安そうな顔をしていました。でも、だれも文句を言わず、「だいじょうぶ！がんばれ！」と声をかけていました。その子もニコッと笑って走っていて、見ていたぼくもうれしい気持ちになりました。みんなが応援し合っている様子を見て、心がポカポカあたたかくなりました。

また、ぼくの友だちに、字を書くのがとてもゆっくりな子がいます。ノートをとるのに時間がかかって、先生の話についていけないときもあります。でも、その子はまじめで、がんばり屋さんです。ある日、その子が「ノートうつすの手伝ってくれる？」と言ってきたので、ぼくは「いいよ！」とすぐに言いました。いっしょに見ながら写したら、とてもよろこんでくれました。ぼくも人の役に立てたことがうれしくて、「またなんかあったら手伝うわ」と言いました。

みんながそれぞれちがうけど、そのちがいをみとめあって、助けあうことが人権を大切にすることなんじゃないかと思いました。人はだれでも、ちがった考えをもっていたり、ちがう見た目をしていたりしています。でも、それはわるいことではありません。ちがうからこそ、いっしょにいる意味があると思います。

この前、休み時間に一人でポツンとすわっている子がいました。ぼくは気になって「どうしたの？」と声をかけました。その子は「なんとなく、みんなの中に入れない」と小さな声で言いました。ぼくは、「じゃあ、いっしょにあそぼうよ！」とさそってみました。最初はちょっととまどっていたけど、いっしょにあそんでいるうちに、どんどん楽しそう

な顔になっていきました。あとで「ありがとう」と言ってもらえて、ぼくも心があたたかくなりました。

ぼくは、「みんなちがって、みんないい」という言葉が好きです。この言葉を聞いたとき、「ほんとうにそうだな」と思いました。ちがいがあることをうけいれて、やさしい気持ちをもつことができれば、きっとけんかも少なくなると思うし、みんなが楽しくすごせるようになると思います。

人権は、むずかしい言葉に聞こえるけど、じつはとても身近なことだと気づきました。友だちを思いやる気持ちや、人の話をしっかり聞くこと、自分とちがう人をバカにしないこと、どれも人権を大切にすることにつながっているんだと思います。

これからぼくは、まだ中学生になったばかりなので、もっといろいろな人と話して、いろいろなことを学んでいきたいです。そして、どんな人とも仲良くなれるように、ちがいをこわがらずに、やさしい心でいっしょにすごしていきたいです。人を大切にできる気持ちもわすれずに、大人になっても人権を大事に尊重できる人になっていきたいと人権作文を通して思いました。

最後にこの人権作文を通してよりよい中学校生活ができるようにこのことをわすれずに日々がんばっていきたいです。

【奨励賞】

「いじめの助け合いリレー」

近江兄弟社中学校1年 吉田 未菜

私の「よしだみな」という名前。それは、小学四年生の頃、ある出来事、いじめによって、一時期嫌いになりました。

私は、小学四年生の頃、いろいろなあだ名をつけられました。最初は、みなりん、みなっぺ、という可愛いあだ名を友達がつけてくれました。ですが、ある日の下校中。なぜか、私のあだ名を決める、という風になりました。そして、私の苗字「よしだ」が由来となり、あだ名は「よっしー」になりました。その時は、ただいじられているだけだと思っていました。なので、笑いながら、やめてよー、と言って帰りました。ですが、翌日学校へ行く时下校班のメンバーだけでなく、クラスのほとんど、隣のクラスまで広まっていました。みんなから「よっしー」と呼ばれるのは正直つらかったです。その後、しばらく日が経ってから、社会の授

業で滋賀県の伝統工芸品「江州よしすだれ」を習いました。その授業の後、あだ名が変わり「よしすだれ」と呼ばれるようになりました。流石にそのあだ名は嫌になり、よしすだれは無理、と言いました。ですが、結局よしすだれと呼ばれるようになりました。だんだんとエスカレートしているのは感じました。ですが向こうもいじっているだけ、笑ってやり過ぎました。それでも、吉田という苗字で生まれなければ良かった、と思うこともたびたびありました。そして、そこまではまだ良かったのです。その後私が一番印象に残っているあだ名である、「みなごろし」で呼ばれるようになっていきました。そのあだ名で最初に呼ばれたのは、下校中。みんなあだ名で呼んでくるので、少し距離をとって帰っていました。そうすると、急に「みなごろしー。」と叫んできました。急なことに驚いていると、続けて「新しいあだ名、考えたー。」と言ってきました。流石にそこまで言うのはいじりにしてはおかしいと思い、私いじめられているかも、と感じました。自分の名前前で遊ばれたことに対する悲しみが胸がいっぱいでした。そして、一緒にいるのが嫌になり、その日は走って帰りました。家に帰って家族に相談。翌日、先生に相談することにしました。それ以降はもうあだ名で呼ばれることはなくなり、すごくホッとしました。

私はこのあだ名でのいじめの体験で、いじめのつらさを実感しました。そして、私はこの体験から、いじめが起こってしまうのは、いじめる側が、最初はおもしろ半分でするいじりからだと思いました。いじりを続けていくうちに、面白くなっていき、いじりが度を越えること。それがいじめにつながると感じました。もちろん全てのいじめがいじりから始まっているわけではありません。それでも、知らないうちにいじりがいじめへと変化し、相手を傷つける場合も多くあると思います。そのため、いじめに発展していかないためにも、いじりは程よいところで止めることが必要だと感じました。ですが、その程よいところで止めることはとても難しいです。なぜなら、いじめられている側は、嫌な状況を乗り越えるために、笑ってごまかす場合も多いからです。それにより、いじっている側は相手が嫌がっている、苦しんでいることに気づけません。そして、相手を追い詰めてしまいます。実際に私もいじられているだけだと思いみんなの雰囲気に合わせて笑っていました。それで、どんどんいじりがエスカレートしていったのだと思います。

それでは、いじめに発展しなくするために、どうすれば良いのでしょうか。私は、いじりを何度もくり返さないこと、が大切だと思いました。相手が笑っているからといって、何度もくり返してしまうと相手をどんどん追い込んでしまいます。また、相手のSOS「やめて」を見逃さないことも大切だと感じます。「やめて」その一言を見逃さず、自分の行動を改める。それにより、いじりをやめることができます。相手が追い

詰められ、ニュースで見るとような自殺、不登校になる前に終わらせる、そのために必要なことだと思います。

私はこれから、人のSOSに気づけるようにし、いじめを少しでも減らせるようにしたいです。そして、いじめが起こった時は、助けてあげたいです。いじめられていた人を助ける、その行動で助けてもらった側は「私もいじめが起こったら助けよう」と思ってくれるはずです。そして、それがきっかけでいじめが起こった時に助けようと行動します。それで助けられた人は私もいじめが起こったら助けよう、と思い行動に移していきます。これをくり返して、リレーのように助け合いのバトンをつないでいきます。そして、少しずつ少しずついじめという行為を減らし、つらい思いをする人が少なくなって欲しいです。

【奨励賞】

人権

近江兄弟社中学校1年 横山 志帆

私は、小学生のとき友達との付き合い方でとても悩みました。自分の都合のいい友達を作る為に一人を悪者にする人、好きな格好をしてるだけなのに、「流行っていない」「ダサイ」と陰口を言う人、SNSをしてないという理由で仲間外れにする人、誰かをおとし入れて優位に立とうとする人、そんな陰口を言い合う毎日が続き、学校に行く事が「しんどい」と思うようになり、学校を休みがちになりました。

学校生活や人と向き合うとき「本当の気持ち」を伝える事は、とても難しいです。自分の本当の気持ちが上手く伝わらず、異なった解釈で人から人へ伝わっていくこと、その子の相談にうなずいただけなのに私が言った事となり広がっていく事が多くあり、私は、自分の気持ちをいう事が怖くなり、「どうせ裏切られる」と思い本心を話さないようにしていました。偶然私と同じような思いを持った友達と話す機会があり、同じ事で悩んでいることを知り私達は安心しました。何か良い改善策がないか話す中で、「自分の気持ちに反することは共感しないように、誰かを否定しないように、誰かを一人にしないようにしましょう」と意識を持って過ごすようになりました。そうすると同じような思いを持った仲間が増え始め、毎日が変わっていきました。皆言い出せなかっただけで、嫌な思いをしていたのは一緒だという事がわかりました。信じられる友達もでき、友達は私の事を知ろうとしてくれ、私は友達のことを知りたくと

思いました。自分以外の人を認め、信じてくれる人がいる事の心強さも感じました。支えてくれた家族友達に出会えたことは、簡単そうで難しい事だと思っています。家族にも本当に困った時は逃げてもいい、今いる場所だけが私の世界の全てじゃないと思えるように教えてもらいました。「人と違う」のは当たり前のことですが、とても怖いことです。環境によっては、仲間外れにされる事があるので相手にあわせたり、知っているふりをしてやり過ごす事もありました。今、ニュースでもSNSが問題になっています。便利なものではあるけれど、無ければこんなに傷つく人もいなくなるので必要ないのではないかと私は思います。インターネットやテレビで見ると何か事件を起こした時など、それがプライベートな問題なのにまったく知らない他人のダレかに悪意を持った書き込みをする人がいるのも事実です。また、悲しい事故で家族を亡くされた遺族の方へ生きていくのが辛くなるような言葉を投げかける記事も見ました。どうしてそんな事ができるのか本当に理解ができません。芸能人や周りの人に対し個人が作った、勝手なイメージをその人の本質だと思込み、そのイメージと違うと、幻滅し、相手を傷つけるような言葉など、SNSに悪意ある言葉を書き込み、自分は良いことをしていると思っている人達がいることに、悲しくなります。現代ではそれが理由で「命」を落とす人もたくさんいるのに、「皆んなもしているから」と自分を正当化し誤りを正せない人もたくさんいるように感じます。

私は芦田 愛菜さんの「信じることは」のインタビューで話された言葉がとても印象に残っていて、大切にしたいと思ったので紹介したいと思います。「その人を信じます」という言葉。それは、自分が理想とする人の人物像に期待をしているということ。だからこそ、イメージと違うと、人は裏切られたという発想をする。だけどそれは、その人の見えなかった部分が見えただけで、全てがこの人であるということ。それも含めて受け止められるようなゆるがない思いがあることを信じるということ。

人を信じることは難しい事ですが、それでも本質を見て、そんな人じゃないよと大きな声で言えるような人になりたいです。今、私は中学生になり、学校では「隣人愛」という言葉を学びました。

「自分を愛するように、隣人を愛しなさい。」

私はこの言葉がとても好きです。ただ隣に座った人、すれ違った人、困っている人も大事な友達、家族のように大事にしたいです。もし、誰かに悪意を抱き傷つける状況になった時は、この言葉を皆さんにも思い浮かべて欲しいです。誰も傷つかない、傷ついた人がいたら、皆でよりそえる世界であって欲しいです。

私が思うに人権とは、一人一人が自由に好きな事を出来、差別のない誰でも幸せになる権利をもった世界だと思っています。そして、相手の事を

尊重し、皆んなが暮らしやすい世の中になる努力をすることが大切だと考えます。

【奨励賞】

普通による無意識の差別

彦根市立中央中学校2年 松尾 杏

最近ではバリアフリーやユニバーサルデザインなど、障がい者も快適な社会生活を送るための取り組みが発展してきている。しかし、障がい者への人々の意識というのはどうだろうか。学校では障がい者への差別はしてはいけないということも学んだ。また最近では障がい者への偏見や差別を無くそうという意識や行動も広まってきている。しかし、実際のところはどのようなのだろう。本当に障がいを持つ人と持たない人との大きな壁、つまり差別は今、減ってきているのだろうか。

ある日、教室の誰かが「お前、障がい者やん。」と冗談で言った。また別のクラスメイトが「お前、障がい者はかわいそうやろ。」などと発言し、少し笑いが起こっていた。クラスメイトが冗談で言っていたの分かっていて、私も全然気にしていなかった。でも、後で思い返すと、その言葉が少し引っ掛かった。障がい者という言葉が冗談などに使われているから。私はこの時、差別してはいけないと思っていても「私と障がい者は違う」、「障がい者はかわいそう」と無意識にできてしまっているんだなと感じた。このようなことで悲しい気持ちになってる人がいないわけない。差別は自分たちが気づいていない間にやっつけてしまっているから無くならないのかもしれない。

無意識の差別ができる原因は「普通」という考えからだと思う。障がいを持っていない人から見た「普通」という偏見が誰かを苦しめているのかもしれない。そもそも、普通とは辞書では「特別でない、一般的、他と特に異なる性質を持っていないさま。」と記されていた。みんなが一般的だと思うこと。でも普通なんて一人一人思う形は違うのかも。無意識の差別をなくすためには自分が思う普通がみんなの思う普通だと思わない。そうやって、みんなが当たり前を理解できることで差別をなくすことにつながると気づいた。私はこの作文を書いているうちにそもそも普通なんてないんじゃないかと思った。普通という基準がみんなそれぞれ違うのなら、どれもいい意味で特別なんじゃないか。もしも普通という言葉が存在しない世界があったら、みんなが自然と理解し合えて、誰もが自由に生活できるのかもしれない。

私の祖母は耳に障がいを持っている。だから母が小さかった頃、母が祖母の代わりに電話に出ていたようだ。最近話を聞くと私の祖母は平日、毎日卓球に打ち込み、喫茶店で接客業をしているらしい。祖母は障がいの有無に関係なく周囲と同じように暮らしている。私は障がい者だけど元気だなと思っていた。今考えると私がいつの間にか祖母を上から目線で見ていたのかもしれない。でも祖母とたまに会うたび、「だけど」という感情はいつのまにか無くなっていた。母の話を聞いた時、少し特別感を感じていたが、祖母の姿を見て、自分らしさの大切さに気づいた。祖母のことを通じて私が伝えたいのは障がい者だから何もできないわけではないということだ。あくまで私の考えではあるが、「障がい者はかわいそう」と感じることは、悪口ではなくても、障がいのない人とどこかで比べている証拠ではないだろうか。きっと無理だろうとできることまでうばってしまうと、かえって差を生んでしまう。何かでしぼられる社会より誰でも祖母のように自分の好きなことを自由に挑戦できる社会のほうが絶対いい。できないことを支え合うことはすばらしいのだが、私が同じ立場なら、周りと同じように接してほしいな、なんだか悲しいなと感じるだろう。

最近障がいのある人との格差をなくすという「公平」が広まっていて、みんなが暮らしやすい社会になっている。しかし、自分と他人を同じ目線で見る「平等」は、まだ完全には意識されていない。誰もが差別なく、個性を大切にするために、常識にしばられないことが大事だ。私は、「障がい者だから」ではなく、人には必ず得意不得意があり、それくらいいいじゃないかと思い、自分と違うところも認め合い、どんな人にも「平等」に接することができるような人になりたい。そのために私の思う普通について一つ一つ考えたい。今の私なら、あの日のクラスメイトが言った話におかしいと思い、なぜおかしいのかも分かるはず。

いつか社会が「普通」という考えによる無意識の差別がなくなって、誰でも自由に生きられるようになることを心から願います。

【奨励賞】

なりたい自分

近江八幡市立安土中学校1年 西川 結恵

私は、小学校一年生の四月に右腕、中学校一年生の四月に左腕を骨折しました。

右腕を骨折した時は、指が少し出る程度で右腕全てが固定されてしま

い、自由に動かすことが出来なくなりました。今まで使えていた腕が突然使えなくなると、困る事が沢山ありました。入学してすぐだったので、授業で文字や数学の勉強をしても書けない、体育の授業は出来ない、給食で箸が持てない、かばんが持てないなど、色々な所で不自由を感じました。家では、お風呂に入りたくても一人で服が脱げない、体が洗えないなど、周りの人に手伝ってもらわないとできないことが沢山ありました。

左腕を骨折した時は、自宅では、右手の時と同じ様なことで苦労しました。学校生活では、自転車での学校登校が出来ない、体育の授業が出来ない、大きな荷物が運べないなど不自由を感じました。

普段、当たり前前に生活していたことが、けがをしたことで、こんなにも不自由になることを知りました。でも、私の様子を見て、「荷物を持ってあげるよ。」と声をかけてくれた友人、けがを心配して助けてくれた友人、着替え、入浴を手伝い、毎日学校まで送迎してくれた家族、友人や家族が私の出来ないことを助けてくれたから、私は周りの人と同じように生活できたと思います。そして「大丈夫?」「出来る?」と声をかけてもらえることが、こんなにも嬉しく、心強い事なんだと気づきました。

私の場合は、誰が見てもわかる状態だったから、色々な人が声をかけ、助けてくれたと思います。でも、外見からでは分からない障がいや病気があることも知りました。

私の従兄には障がいがあります。これを知ったのは、人権作文で何を書こうか悩んでいた時に母が教えてくれました。母から聞けなかったら、私は何も知らずにいたと思います。それは、従兄は仕事もしているし、一緒に走ったりして遊んでくれるし、話も出来るし家の手伝いもよくしているし、どこにでもいる優しい普通の従兄です。母から障がいがあると教えてもらった後も「どこに?」「何の?」という感じで不思議でした。

私と従兄で考えた時、私の場合は、誰が見てもすぐ分かる。だけど、従兄の場合は、聞かなければ分からない。知らなければ気づかない。このことから、私は、外見だけで人を判断するのは良くないと思いました。だからこれからは、困っている人がいたら「大丈夫ですか?」とまず声をかけることが大事だと思いました。その勇気ある一言で、私がそうだったように、助かる人もいます。問題が解決することもあると思います。日本人に限らず、外国の方に対しても同じ事が言えると思います。外国の人だから言葉が通じないのでは、英語が分からないから無理、と見ないふりをするのではなく、もしかしたら言葉が通じないかもしれないけど「大丈夫ですか?」と声をかけることが大切だと思いました。そして、今後はどんな人に対しても、その一言が言える人には私は

室に入れてもらえず、会えたのは亡くなる直前でした。大切な家族が突然いなくなり、辛く悲しく時が止まったかのように感じ、何とも言えない感情で日々を過ごしています。優しくてかっこいい自まんの父でした。家族をいつも大切にしてくれていました。父はどんな気持ちで亡くなったのかと考えたり、もっとこうしていたら、ああしていたらなと後悔もあります。ありがとうと最期に伝えたかったです。人生は若いから大丈夫とか、今朝元気だから大丈夫とかではなく本当に急にまさかのことが起こります。みんな忘れていますが、今、生きていることがきせきなんだと気づかされます。ぼくのトイレに相田みつをさんの「いのち」というすてきな詩がはってあります。それは、「あのね自分にとって一番大切なものは自分のいのちなんだよ だからすべての他人のいのちがみんな大切なんだよ」という詩です。本当にこれを見るたび、ぼくはその通りだと思います。父が亡くなってすごく落ち込んでいたぼくたち家族に、祖父母や親せきの人、そしてたくさんの友だちがそっと寄りそって心配して元気づけてくれたり、はげましてくれました。優しさがとてもうれしくてたくさん助けてもらいました。父の友だちも母の友だちもぼく達に本当に優しくしてくれました。優しい言葉がけで元気ももらえました。人は一人では生きていけないと感じました。ぼくがしてもらったようにぼくも大切な人に優しく寄りそってあげられる人でいたいと思いました。同じことばでも人を傷つける言葉を言うのではなく、こうして人の心を救えるような優しいことばもあります。上手にことばを選んで、相手の気持ちも理解し話していけたらなと思います。父が生きたかった今日を大切に、そして感謝をしながら生きていこうねと残された家族で話しました。みんなが、いのちの大切さに気づいて、思いやりのある言動が出来る社会になってほしいと願います。

第44回全国中学生人権作文コンテスト
法務省人権擁護局長・全国人権擁護委員連合会長
感謝状贈呈校

滋賀大学教育学部附属中学校

大津市立瀬田中学校

近江八幡市立安土中学校

東近江市立五個荘中学校

法務省人権擁護局と全国人権擁護委員連合会では、長年にわたって多数の作文を応募していただいている中学校などに対して敬意を表し感謝状を贈呈しています。

例えばこんなことがあったとき・・・

- ☑ 友だちからいじめを受けている
- ☑ インターネット上で悪口を書き込まれた
- ☑ 暴力を受けて悩んでいる

秘密は守るよ。勇気を出して相談してみよう！

★ 電話で相談！

こどもの人権110番 **0120-007-110**

(フリーダイヤル)

月曜日から金曜日まで（年末年始、祝日を除く）
8時30分から17時15分まで

★ メールで相談！

こどもの人権SOS-eメール

インターネット人権相談

検索

<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

★ SNS (LINE) で相談！

法務局LINEじんけん相談

友だち登録して御相談ください。

月曜日から金曜日まで（年末年始、祝日を除く）
8時30分から17時15分まで



みんなのこころ 元気になあれ！

発行 令和8年3月

発行者 〒520-8516 大津市京町3丁目1番1号（大津びわ湖合同庁舎）
大津地方法務局・滋賀県人権擁護委員連合会

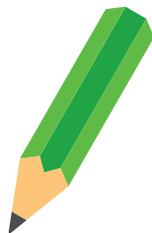
禁無断転載

本作文集の作品を地方自治体等が機関誌等に転載する場合は、
以下に御連絡ください。

大津地方法務局人権擁護課

電話 077-522-4673

「いじめ」や暴力行為等は人権侵害です。
法務局・地方法務局では、
人権侵害による被害を受けた方を
救済するための活動を行っています。
お気軽に相談して下さい。



人権イメージキャラクター
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん



人権擁護活動
シンボルマーク

このシンボルマークには、『人権』は全ての人生まれながらに持っているものであり、世界中の人々の『人権』が最優先に尊重され、共存し合っていかなければならないという願いが込められています。